

陶淵明詩解



鈴木虎雄譯註

陶淵明詩解

麗澤叢書之六

昭和二十三年一月十日 印刷
昭和二十三年一月十五日 發行
昭和二十三年十一月三十日 再版

定價 金參百圓

著者 鈴木虎雄

發行者 久保井理津男

東京神田駿河臺
京都田中西浦町

印刷者 鈴木幸保

京都田中西浦町

配給元

日本出版配給株式會社
東京神田淡路町二ノ九

發行所

東京神田駿河臺
會員番號A一〇二八
電話神田一〇二八
一〇六七五
八七五二
三〇二

株式會社 弘文堂

例言

一淵明が集、余童年より愛誦して白髮短鬢の今に至る、而して未だ正解を得る能はず、偶々書肆來りて其の詩を解釋せんことを求む、乃ち往年記する所の私注を篋底に探り、再思の後、諺語を用ひて之を綴り、一は以て後進有志の士の便に供し、一は以て大方博雅の諸賢の高教是正を仰がんと欲す。

一作者の傳記詳ならざれば其の作品の眞意を知る能はず、而して淵明の傳記、その出處進退の年時に於て正確に知り得るもの多からず、甚しきはその年歲についても猶紛紛の議論あるを免れず、況や其他をや、余の知る所を以てすれば淵明の傳記に關するもの、淵明自撰の五柳先生傳及び其の作詩文、劉宋の顏延之の陶徵士誄、梁の沈約の宋書隱逸傳（梁の蕭統の陶淵明傳・陶淵明集序、晉書・南史の隱逸傳は皆之に本づく）、蓮社高賢傳、趙宋の仁宗の朝李慶孫序する所の昌邑陶氏族譜、李燾の靖節新傳三卷書佚、王質の陶栗里譜、吳仁傑の陶淵明年譜、張績の吳仁傑陶譜辨證（大部分は亡び少しく李公煥本に散見）、陶茂麟家譜（元の李公煥の命子詩の注に之を引く、實は宋の鄧名世の古今姓氏書辨證に本づく）、清の陶澍の靖節先生年譜攷異上下二卷、（王質・吳仁傑の二譜を擧げ次にその是非を辨證す）、其他清の閻詠 何焯 錢大昕 洪稚存 包世臣等各、多少

の辨あり、近時に至り梁啟超 古直（屠冰）等諸氏亦致證あり、余は淵明の傳記につきて確信あるものに非ず、暫く陶澍氏の説を本とし假に淵明年譜略を撰し別に系譜を作りて、之を詩解の前に掲ぐることをせり。

一 淵明の集については、梁の蕭統、北齊の陽休之以來、宋元以下の時代を経て幾多の變遷あるが如しと雖も其の本文に至りては現時見る所のものと大異同ありとはおもはれず、余の見る所の集本は多からず、僅に陶淵明文集十卷（毛氏汲古閣重雕南宋紹興本、傳東坡手書板本大字、北宋の治平中、僧思悅の校する所のもの南宋に傳はり紹興中に覆刻せられ、それを更に毛氏の刻せるもの、我が朝松崎慊堂の天保刻本の原本）校正陶靖節集十卷（阿部氏藏版とあり、白紙美本四冊、卷首に秋定向の題言、卷尾に萬曆己卯蔡汝賢の跋あり、此書は蔡本の覆刻本なり）、松崎慊堂の天保中の覆刻本、（前記毛氏本の覆刻）、近藤元粹評訂陶淵明集八卷（寛文四年に翻刻せる明の天啟二年楊氏刻本に據る、明治廿七年嵩山堂刊）、毛斧宋本覆刻本十卷（清咸豐辛酉莫友芝跋、光緒二年刊巾箱本二冊）、等に過ぎず、余は陶澍本を主として之に据れり、陶淵明集版本の沿革に至りては近時我が橋川時雄氏の陶集版本源流攷（雕龍叢鈔之一、昭和六年辛未文字同盟社刊）ありて詳細を極む、好學の士は就て閲讀せられんことを望む。

一 淵明集の注釋、評論については、清の陶澍の靖節先生集十卷卷首一卷卷末二卷の集註は

略、集大成に近し、故に余の此の詩解は主として之に据れり、今先づ之を記し、次に其の餘に及ぶべし、(前記の書、以下之を陶澍の集註本と稱す、)陶澍の集註本は、宋の湯漢(東磧)の靖節詩註四卷、元の李公煥の箋註陶淵明集十卷(明萬曆丁亥休陽程氏所梓)、今李公煥本は四部叢刊本によりて之を見ることを得、明の何孟春本、汲古閣本、焦竑本、張溥百三名家本、張

爾公本、毛晉綠君亭本、何焯校正本、黃文煥陶詩析義本、吳瞻泰陶詩彙註本(陶詩彙註

四卷、今光緒丙申許印芳覆刊民國十五年上海大中書局印本あり、蔣薰本、以上の十二種を採用せり、此中には固より

注釋と關係なく本文の校訂のみに採用せるものあること明かなり、集註本採用する所の外、四庫全書提要存目に載する所の清の邱嘉穗撰陶詩箋五卷は余未だ之を見ず、嘉慶丙寅順德の溫汝能(謙山)の纂訂にかかる陶詩彙評四卷、石城の顧嗣的集說にかかる陶淵明集箋註十卷(原名陶集發微)、嘉應の古直(眉水)著はす所の陶詩節詩箋四卷、等は皆近時の刊本ありて容易に見ることをうべし、集註本以外には余は此等諸書をも参照せり、更に「文選」の注、「文館詞林」董康覆本、元の劉履の「選詩補注」、陳祚明の「古詩選」、王士禎漁洋の「古詩選」聞人倭箋の陶詩に關する部分は亦參考の用に供せり。

評論については古今諸家の詩話、之に言及せざるもの稀に、而して其の主要なる者は大概前記の註評諸書に集録せらる。

一本文文字の異同は大に注意せざる可らず、例へば一字について言はば、桃花源記の親。

往・規。往の如き焦竑已に親を非とし規を是とするに莫友芝は卻て規は是、親は非なるを説く、余は親に従ひたり、此くの如き場合其の兩通しうべき者は或は併存し、然らざるものは余の是と考ふる者に従ひたり、雜詩第十一首の尾句遙遙春夜長の春字の如き、之を秋に作らざれば全篇の義通ぜず、然るに此字を問題とせるもの前記參考諸書に一も之あることなし、異しむべしといふべし、此の如き場合往往にして之あり、注家には諸種の詩句を一一時事に引きつけてその隱微を求めんとするが如きものあり、詩經の解釋に始まり、杜詩の解釋其の波を揚げしに由るとはいへ、實に禹域學者の通弊にして余輩の取らざる所なり、余は字句の解其の正しきを得ば作者の眞意は自ら其中に存すと考ふるものなり、故に余は詩の本文に關する外自己の想像に由る時事引用は一切之を避けたり、「述酒」詩の如きは時事と關係あるらしきも、其の辭義隱晦にして古來諸家の説あるも通じ難し、故に是亦全く解を省くこととなせり、其他解に於て確信なきものは或は推量、或は疑辭を存して之を區別し置きたり、但、余の薄學淺識、其の自ら信する所のものと雖も或は誤謬なきを保ち難し、是れ博雅の高教を待つ所なり。

昭和二十二年四月十日

京都市等持院中町の寓居に於て

鈴 木 虎 雄 誌す

陶詩を解釋するにあたりて

一 淵明の人物

鍾嶸によつて「古今隱逸詩人之宗」と呼ばるる陶淵明、彼は單に一個の素樸なる田舎漢であるか、耒鋤を手にして全く人間と隔離して世をわたる隱遁者であるか、山を看、酒盃を手にして終日轟飲する醉狂者であるか、謎の人物といふべきである、しかしながら仔細に之をながめる時には決して單なる田舎漢・隱遁者・醉狂者では無いと考へられる、壯年には張掖から幽州に至り、無終の田子春を訪ひ、稷下の談士と語らんと欲したる彼は、其の足跡は遠く今の甘肅省から直隸の北境、山東省の西北まで及んでゐるのである、此等は果して何んの爲であるか、朱子をして「淵明の詩は人皆平淡なりと説く、看よ他が自ら豪放し得て來りて覺えず其の本相を露出するものは是れ詠荆軻の一篇なることを、平淡底の人は如何でか這樣的言語を説き得て來ら

ん」と評せしめたるは、眞に能く淵明の人物を看破したものだといふべきであらう、而して彼は決して單なる豪放の士ではない、内に確固たる道義心を持ち、自己の操守は決して棄てざる堅忍不拔の志を有したものである、彼の出處進退はすべて此に基いてをる、彼の道義の信念は儒教に本づく、彼の詩文をよめば其の「論語」との關係が如何に深く密切であるかは容易に知られる、詩書敦宿好といひ、游好在六經といひ、孔子と子路との慍見・固窮の問答の語は幾度となく詩中に用ゐられ、飲酒第二十首の羲農去我久の一篇の如きも皆彼が儒教に私淑するものであることを見るに足るのである、又、「百行の貴しとする攸を原ぬるに、善を爲すより之れ娛むべきは莫し」、「上天の成命を奉じ、聖人の遺書を師とし、忠孝を君親に發し、信義を郷閭に生じ、誠心を推して顯はるるを獲、矯然として譽を祈めず」感士不遇賦といふも儒教思想である、けれども彼は儒者の様に遊食して道を講じ文を習ふ如きを屑しとはしない、それは「勸農」の詩に見ゆる如く孔子や董仲舒の如き聖人や大學者にして始めて許さるべきで、さもないものは耕作して自給自活すべき

ものだとしてをるのである、力耕主義を堅く執つてそれを自ら實行し、荷蓀丈人の如きを理想としたのである、一方に彼の出遇うた時勢はどうであるか、人は時勢の影響から脱することはむづかしい、彼の壯年の頃から晉の王室の權力は内憂外患のため弱りかけてゐた、劉裕が北伐して關中を平げたのは彼の五十三歳の時であり、劉裕が晉を亡して宋の天子となつたのは彼の五十六歳の時であるが、早晩かやうな運命に陥るであらうことは彼にも推量がついたのではなからうか、壯年北方及西北の僻遠の地まで出かけたのも國事を憂へたためであらう、而して彼の曾祖父陶侃は晉の名臣で大司馬長沙公とまでなつた人である、その子孫として時世がかく降りかけてゆくのをみては彼にはたまらぬ感慨があつたであらう、之がために酒は彼の平生の嗜好物であつたであらうが益々酒を借り酔に乗じてその胸中無限の愁を逐ひ掃ふより外は無かつたであらう、かくて儒教思想の信者でありながら世の偽惡を憎んでは太古淳樸の時代に返へらんことを叫んだり、其の世界觀は虛無說であり、處世方は運化に委せてなるがままにまかせて身心の自然消滅を待つとい

ふところに落ついた、「神釋」の正宜委運去、縦浪大化中、不喜亦不懼、應盡便須盡、無復獨多慮」といふ境地がそれである、これは老子の虚無、莊子の委順の説、に本づくものと察せられる、この様に觀察してくると余は淵明なる人物は「理想は儒教に在るが、實際の行爲は老莊流に歸着したもの」とするのが適當かと考へるのである。

一 淵明の文辭

形式 思想内容 詩題

禹域の文學、周代に詩經の四言詩あり、周末屈原宋玉等の騷賦起り、漢初四言詩及辭賦あり、漢末よりして五言詩が盛んになつた、四言詩は漢初よりあるにはあるが魏晉より復盛となつたので、中にも淵明の四言詩は彼の五言詩と同様に彼特別のものである、趙宋の劉後村は淵明の四言詩について、「四言は曹氏父子（魏の曹操、其の子曹植）王仲宣（粲）陸士衡（晉の陸機）よりして後、ただ陶公最も高し、「停雲」、「榮木」等の篇は殆ど建安（後漢末の年號）を突過す矣」というてをるが其の通りであつて、詩經の四言と似た所もあるが決して模倣ではなく、魏晉の典綽なるそれとは全く異なり、彼特

有の思想を自由に單に四言といふ形式を借りて述べだしたに過ぎないのである、五言詩は前漢末から魏特に魏の曹植あたりから整うて來たのであるが晉に入り陸機から非常に對句を貴びそれに苦心する様になつた、つゞいて謝靈運 顔延年あたりになると一層其の傾向が甚しくなつて來た、淵明はかかる時代に出て來たがやはりここにも彼自身の立場を取つて時流とは離れ寧ろ散句（對をしない句）を主として用ゐた、それは文章に於て對句を避けたと同様の態度である、ここに彼の特色がある、しかしながら對句を用ゐないわけではなく、彼にも可なり時代風の對句があるのである、かくして彼の詩は彼の詩の内容と相待つて彼獨自の作風を興したのである、以上は形式の方面から見た大體である。

次に思想内容等について觀察してみよう、詩經の國風と稱する部類には民謠があり、人情に本づいた自然の歌詩があるが、大雅小雅、頌等の部類となると全く政治上道德上の立場から作られてゐるものであつて、政治道德の讚美諷刺が主となつて實用向きのものである、文學は政治道德の奴隸の役目を

つとめてをるに外ならぬ、魏晉以後から詩は漸くこの羈絆を脱して政治道德以外にも詩は詩の獨立の境地があるようだといふことがわかつて來た、つづいて佛教や老莊思想がやりだして儒教以外にも思想の別天地があることもわかつてきた、晉初に流行した清談・玄談などは老莊思想を貴族社會が話題としたことをいふのである、これ等の思想を盛つた詩が可なり有つたのとことだが遺憾ながらそれは多く傳はらぬ、それから老莊告退、山水方滋といふことばがあるやうに清談はなしが止むと山水の話なども起きることになり、文學にも山水が登場するといふことになった、筆を執るものが官吏で儒者で、衣冠束帶して宮省衙解の間ばかりにさまようてゐるうちは、詩を作つても其の題目對象はそれ等に關係あるものに限られてゐた、それが山水の間に放たれて天然と親しむ様なればそこにおのづと山水に關する文學が生れるわけである、この山水文學の代表者は淵明と時を同じくする謝靈運其人である、淵明は壯年の頃は僻遠の地まで跋涉したから種種の山や川をも經過したであらうが特に山水を賞玩するためではなかつた、郷里に退いてからは廬山

の麓にじつとしてゐたので山や湖水は時には眺めたが、其の生活上最も親しんだのは田園である、躬ら耕作してゐるのだが、田園生活の甘苦は最も彼の熟知する所である、それが遂に詩となつて進み出たのである、そうして彼の特別の技能は彼をして田園詩人の代表者たるに至らしめた、陶謝の二大詩人が田園山水をうたひ出してから齊梁時代へかけて風雲月露、花鳥草木、何でも自然の景物はみな觀賞の對象として詩人に取り入れられ詩文の内容は豊富になり、表現の方法は益々精緻工妙に赴き、謂ゆる南朝から隋唐以後の時代に及んだのである。

次に鑑賞の上から淵明の詩趣について鄙見をのべよう、淵明の詩は通常、平淡、沖淡、枯淡であり、自然である、とされてゐる、平は平坦、平易などの平でむつかしくないおだやかなことをいふ、沖は虚で心が虚空にひゆる様な氣持をさす、枯は潤ひ光澤のとれたさびたところをいふ、淡は淡泊の詩で濃厚の反對、あつさりとしたところをいふ、言葉を説明すれば此の様なことであるが、其の實感を得るには相當の修養を要するのである、二三古人の評

を言ふならば宋の楊龜山（時）は、「淵明の詩は冲淡深粹、自然に出づ」といひ、朱子（熹）は、「淵明の詩平淡、自然に出づ」、又、「淵明の詩、高しとなす所以のものは、正に安排を待たず、胸中自然流出するに在り」などというてをる、自然に胸から流れ出たから無理がなくて冲淡或は平淡だといふのである、ところが是れが單純なる平易淡泊ではないのでその奥底には濃厚なうま味があるのである、これをさして、蘇東坡（軾）は、「其（淵明）の詩は質にして實は綺、癯せたり而も實は腴じゆ」、劉後村（克莊）は、「枯淡に貴ぶ所のものは、外は枯にして中は膏、淡に似て實は美なり、淵明・子厚（唐の柳宗元）の流是なり」、葛常之（立方）は、「大抵、平淡に造いたらんと欲せば當に組麗中より來り、其の紛華を落すべし、然る後平淡の境に造いたるべきなり」といふてをる、ぢみな如くでうつくしく、枯れた様で脂があるといふ、又そこに達するには一度うつくしいところをとほつてそのうへ華やかなところをはらひ落してつや消しをせよといふのである、淵明の詩にはさういふ風なところがあるのである、晉の大康・元康の時代には三張二陸兩潘一左と

稱せらるるさまさまの作家が出て、それから晉末宋初にかけて謝靈運・顏延之・陶淵明が出たが、顏謝までは謂ゆる「組麗」の引續きである、淵明は超時流の方向を取つたのである。卑近な譬を借りていふならば、牛豚鳥魚の様な濃厚なものはかりたべあとへ澤庵のお茶漬がでたやうなものである、この澤庵茶漬はなか／＼うまい、しかもそれはこつたもので澤庵は大根を吟味し、糠や糟などを精選して適度につけこんでならしたものであり、御飯は上等の精米、お茶は若芽の一番といふ工合にそろつたものである、それ故にうまいはづである、淵明の枯淡はそんな風の枯淡であつて、田舎の泥くさい澤庵に澁茶をぶつかけた様な粗末な澤庵茶漬とは大にちがふのである、諸家の評は先づさやうな意味を申したものと察するのである、顏謝同時の湯惠休といふ僧が、「謝の詩は芙蓉の水を出づる如く、顏の詩は鏤金錯彩の如し」と評した、謝はすつきりとうるはしい、顏は眼もまばゆいほどびか／＼したうるはしさだといふのである、この謝に對する評は一面の眞を言ひあててをるが謝の詩風のすべてではない、謝の詩は巧麗であるが甚だ幽奥なところがあ

る、謝にも亦自然なところがあるが、それは人工の極をつくしてそこに至つたものである、淵明の自然はほんとうに腦の中から流出した自然である、不用意に出たかの如く見ゆるものである、しかし單に流れだしたままかといふと恐らくさうではなく、やはり流出したのちに千鍛萬鍊を加へてさあらぬ顔をしてゐたものであらうとおもはれる、試に一二の例について言ふならば、

陶の「採菊東籬下　悠然見南山」・「欲言無予和　揮杯勸孤影」・「平疇交

遠風　良苗亦懷新」等は散句を用ゐて自然なるものであり、「曖曖遠人村

依依墟里煙　狗吠深巷中　雞鳴桑樹顛」の如きは對句を用ゐて自然なるもの

である、しかし「往燕無遺影　來雁有餘聲」・「弱湍馳文魴　閒谷矯輕鷗」・

「神淵寫時雨　晨色秦景風」等の對句になると時流調であつて顏謝等の對

法と區別しがたいのである、謝は概ね對法を用ゐるのが通例で散法は少い、

「昏旦變氣候　山水含清暉　清暉能娛人　游子憺忘歸」は散にして自然、

「亂流趨正絕　孤嶼媚中川　雲日相暉映　空水共澄鮮」も自然であるが雲

日二句は已に對をなしてゐる、謝の池塘生青草の一句は夢で得た妙句で自